

群読仕方話 竹取物語の後

上演に際して

竹取物語は平安時代初期に書かれた日本最古の物語とされています。

今回は、目で読んでも難解な古典の文章を原文・古語のまま群読仕方話として発表する事に致しました。群読とは一人の語り手が読み上げるのではなく多くの語り手が声を揃えて読み上げる事を言います。また仕方話とは落語の様子に語り手が登場人物に成りきって、身振り手振りを加えて表現する手法の事です。

今公演では、主要人物の竹取の翁おきなとその妻であるおうな。かぐや姫は決められた役者が演じますが、かぐや姫に求婚をする五人の貴公子や天から姫を迎えに来る帝など・・・の役は、語り手がその都度役を演じて行きます。役者達が声を揃え、また文を朗読するのに合わせて実際の登場人物になりきり演ずる・・・。読み手と演じ手の息を合わせるのは、大変難しく困難な事です。竹取物語の全文そのままを読み上げるとなれば、おそらく、90分以上の時間が必要かと思われれます。そこで今回

は、物語の筋書きを辿るのに必要な部分だけを残しカットさせて頂きました。したがって上演時間はおよそ50分にまとめさせて頂きました。また、劇団員の構成の理由から今回のかぐや姫は幼少時代と青年期に分け二人、また、かぐや姫の心の声、心情の部分のみを朗読する役者も登場します。これも「群読」の妙味と思えます。ご観劇の折にその辺りもご注目賜れば幸いです。

尚、お芝居の導入部分では、遼安社中による古代琴の演奏に合わせて上方舞立花流家元の立花典枝先生の舞が御座います。このシーンは、天上界で生まれたかぐや姫が行方不明となり、その姫を探しに地上に舞い降りた天女（かぐや姫の母）という設定で、原作にはない劇団高円独自の演出でございます。神聖なるいにしへの雅な音色と、おごそかな中に伝統の美しさを秘めた上方舞も合わせてご鑑賞下さい。

構成・演出 ねがひ叶



劇団高円

出演

藤井良子	竹取の翁	
川口委呉子	竹取の姫	
十倉杏珠	かぐや姫声、うかんるり、語り十一	
土井 桂	かぐや姫大人、楽座員五	
中村比奈	かぐや姫子供、楽座員六	
梶本亜紀	庫持皇子 <small>くらもちのみこ</small> 、楽座員三	
菅 佑亮	漢部内麻呂 <small>あやべののうちまろ</small> 、帝、天人一、楽座員四	
富田信二	石作皇子 <small>いしづくりのみこ</small> 、匠一、楽座員二	
森 大樹	阿部御主人 <small>あべのみうし</small> 、天人二、語り九、匠三	
松崎由里子	おとおとみのみゆき 大伴御行、語り七、使女二	
塚田有紀	いそのかみのまろたり 石上麻呂足、語り六、匠四	
白鳥功一	天の帝、語り八	
藤尾観馬野	王家の使、語り五、天人三、匠二	
松井勇太	語り一〇、王家の兵、守人、匠五	
都築由美	語り一	
西川由喜	語り二	
荒川由佳	語り三、使女一	
天目一子	語り四	
池内 裕	楽座員一	
特別出演	上方舞	
立花典枝	天女の舞	
遼 安	古代琴	
音響・照明	イクボプロ	

協力
 ならまちセンター
 (財)煎茶道方円流
 藤木夢園
 (株)アーキネット
 ひかり装飾(株)
 奈良きもの会館